24

日本及び中国の脳解剖の先駆者
——河口信任と王清任

邵　沛

中国の伝統医学と西洋医学は解剖に関する立場が大いに違う、これは、中医学と西洋医学の差の最大の特徴である。中国の医学は、中国特有の経絡説の基盤に組織されたものであり、その経絡説は、中国特有の五臓六腑の生理解剖の知識を根底とするものである。従って中医解剖の記録には、脳に関する解剖及び形態の描写が欠けていた。脳と関連した神経については言うまでもない。

解剖に際し、医学者にとって最も重要なことは頭蓋の中の脳を知ることである。脳髄をエネルギー源として認識していたはずである。奇恒の腑に属す脳、髄は精神作用をその機能としない、正式の五臓六腑から排除される。脳の機能は全て心に属した。中医の経典『内経』を除いて、明代の李時珍、方以智、及び清代の汪昂、王恵源など少数の学者が伝統的医説とは異なる見方をしているが、自分の親視解剖した所見でなくて、直接、間接にイエズスから伝聞した知識を参考して、その西洋医学に依拠したものと推定される。

一七七〇年古来の内景説に疑いを容れ、親視実験を重んじられる古河藩医であった河口信任が、頭蓋腔を開いて視神経まで見ている。そして『解屍編』を作った。その中に、脳の解剖図四編を作った。これは日中両国では脳解剖の最初の記録である。彼は書いた脳の解剖の内容は主な以下のものである。

1・脳の概略な構造を理解している、脳の頭蓋骨、脳膜、脳髄、脳血管、脳鎌を識別している。2・大脳回転の形を描述した。3・脳血管を記述している。4・脳鎌の形を形容した。5・脳髄と脊髄の連絡を述べている。

中国は脳の解剖に関して日本より六〇年ぐらい遅れている。一八三〇年王清任は古典医著に疑問をいだき、自己の親視実験にもとづいて正確な臓腑の知識を得て、生理解剖学を体系づけ、それによって臓腑図を作成し、脳髄説を発表した。中国医学の立場から心臓中枢説を否定

し脳中枢説を明確に主張した、それが王清任の『医林改錯』である。王清任は精神の座が心臓ではなく脳である理由について、脳髄説で述べている。主な内容は以下の通りである。

1・脳と脊髄は連続している。これは大体『内経』の内容と同じである。2・感覚器官が脳と連絡していることを述べている。視神経と聴覚及び臭覚は全部脳と密接な関係があることを述べる。それは李時珍、金正希、方以智、汪昂にはみられなかった。3・脳の生理機能と病理変化を述べた。脳の機能も年齢につれて発育し、人の老衰につれて、退化することから脳と体の生命活動の関係が重要な関係にあると述べている。4・脳と関連がある病気を脳の病理として記述している。例えば癇証の発病、小児の抽風及び気蕨などが脳に病因があると述べている。

河口信任と王清任が活躍した時代は異なる。しかし、各各独自の立場と見解から、生きた脳の解剖と観察をはじめ行ったと言える、現代解剖学から見ると、彼らの解剖図と見方は幼稚で誤謬の多いものではあるが、古典医学書の記述に疑問を持ち、営々として臓腑観察に従事した精神、態度は当時の医学界に対して大きな影響を与えた。河口信任の解剖所見は『臓志』に優れることは数等である、当時の医学をして実験重視に向かわした功績は大きい。また西洋解剖学が中国に広く導入されたのは、英人合信が一八五一年『全体新論』を作ったからであり、王清任の臓腑観察より二一年後のことである。

日本と中国は脳の解剖に於いては長い過程があった。河口信任と王清任は日中両国医学界の先覚者である、彼らは両国それぞれの脳解剖の空白を充実した、その故に日中両国の近代脳解剖の先駆者と言っても、過賞ではなかろう。

（中国吉林省白求恩医科大学・順天堂大学医史学研究室）